



## グローカル化として見たグローバル化 —ミームに基づく循環的進化論に向けた試論—

細 谷 龍 平

福井大学国際地域学部教授

hosoya@u-fukui.ac.jp

(受理：2016年11月30日，採択：2017年3月5日)

### 要 旨

本論は、従来グローバル化などの国際関係を取り扱ってきた社会科学と自然科学（ここでは進化生物学）とを学際的に橋渡ししようとする理論的な試みである。

前半では、ハンバーガーの発展史などの事例を通して、グローバル化には均質性と多様性が交互に派生する永続的な循環と進化の構造があることを示す。そしてそれを説明するために、ローランド・ロバートソン（Roland Robertson）などの学説を踏まえ、グローバル化をグローバルなレベルとローカルなレベルとの連関の視点に立って捉え直した「グローカル化」の概念規定を行う。

後半では、このような文化的・社会的<sup>1)</sup>な進化の構造と生物進化の構造との類似性に着目し、グローカル化の動態を説明するため、生物進化に係る科学の手法を借りた理論的枠組みを仮説として提示する。そこでは、進化生物学者リチャード・ドーキンス（Richard Dawkins）の著作で知られる「利己的な遺伝子」論からの類推と、同人が提唱した「ミーム」の概念が、グローカル化における循環的進化のメカニズムと、均質性と多様性が共存し同時展開する一元的な構造を解き明かすのに有用であることを示す。特に、遺伝子の変異が進化を生むのと同様にミーム<sup>2)</sup>の変異がグローカル化のプロセスを生むこと、及びその変異が発現する場合は必然的にローカリティー（地域）<sup>3)</sup>であることが本論の重要な知見となる。

ローカリティーは、地理的な意味に限定せず、ソーシャル・メディアを介した人の集団などの「相対的」なローカリティーも含めて考察する。グローカル化に働く力については、本論ではミームとメディアに分けて捉えた力の分類を提示する。また、ローカルとグローバルの連動を説明する補足的なツールとして、マイクロ・マクロ・リンクに係る

ジェームズ・S・コールマン (James S. Coleman) の図式を援用する。

以上の理論的枠組みを例証する事例には適宜言及する中で、前半で取り上げたハンバーガーの発展史に沿った検証を行う。

キーワード：グローバル化, グローカル化, 利己的遺伝子, ミーム, 社会文化的進化

---

## 1. グローカル化の再定義

グローカル化 (Glocalization) という言葉が研究者の間で使われ始めてから現在まで 20 年余り、このように新たなコンセプトを帯びた新語、特に先行概念であるグローバル化の例に漏れず、その分野、文脈、意味において百花繚乱状態が続いてきている。特にグローカル化の概念を理論的に取り扱った研究は乏しいことがかねて指摘されてきた。しかしその試みはいくつか出てきている。本論ではまず、そのうちの有力ないくつか、特にローランド・ロバートソン (Roland Robertson), ヴィクター・ルドメトフ (Victor Roudometof), および上杉富之の学説をそれぞれ踏まえて、用語と概念を整理し、発展させた新たな理論的枠組みを提示することとしたい。

ロバートソンは、ローカルとグローバルは同じコインの両側だとみなし、グローバル化を彫琢した概念としての一元的なグローカル化論を展開している。その定義は、論文によって言い換えているが、1992 年の著作 *Globalization: Social Theory and Global Culture* で最初に提起した「個別性の普遍化と普遍性の個別化からなる二重プロセス」(Robertson 1992: 102) というのがグローカル化の基本的な概念規定と言って良いであろう。上杉も同様に、グローカル化は、「グローバル化」と「ローカル化」(いずれも上杉の用語法) が同時ないし連続的に進行し、相互に作用し合う過程であるとしている (上杉 2014: 7)。一方ルドメトフは、グローバル化に対する「グローカル化」(同人の定義による狭義のグローカル化であり、上杉のローカル化にほぼ当たる) の概念としての自律性と、そこに働く力の分析可能性を重視する立場から、これら二つの概念を切り離す二元論を展開している (Roudometof 2016: 62-79)。

ロバートソン、上杉、ルドメトフの三者の概念規定を図式化すれば図 1 のようになる。

図中、それぞれの大枠の楕円は、グローバル化ないしグローカル化の総体を示す (ルドメトフは総体に名称を与えていない)。各図の中の下方がローカルレベル、上方がグローバルレベルである。

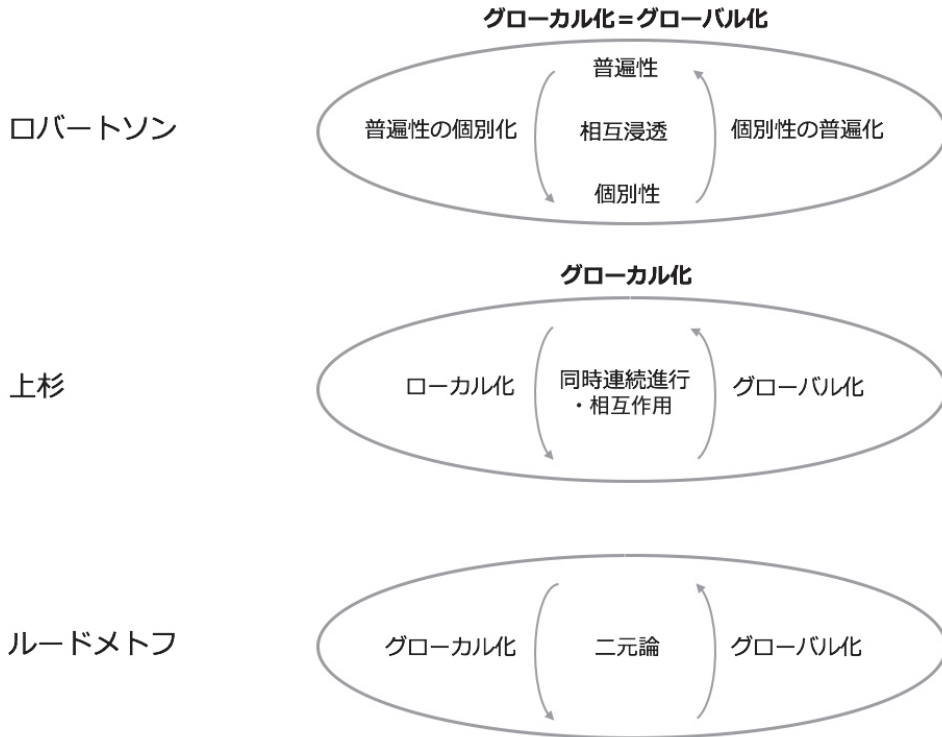


図 1

これら三者の間に実は本質的な矛盾はないと思われる。ロバートソンと上杉との違いは主として同じ概念に異なる名称を付していることにとどまる（上杉はグローバル化を、ローカルなものグローバルなレベルに広まるといった狭義で使っているのに対し、ロバートソンはより包括的な概念としてのグローバル化を維持している）。これら両者とルードメトフとの違いは、用語の違いの他に、ルードメトフが「グローカル化」を「グローバル化」から切り離して二元論的に捉えようとする結果、実際には大きな一体的なプロセスである広義のグローバル化ないしグローカル化の一局面（そこでは近似的に二要素が自律的に働く）を論じている点にある。しかしながら、ロバートソン、上杉、ルードメトフいずれの概念化も併存可能と考えられる。

これら三者のアプローチ以外にも、多数の論者がグローカル化について何らかの理論的な考察を行っており、それらについてはルードメトフの名著 *Glocalization: A Critical Introduction* (Roudometof 2016) に詳しい。それらを検討してみると、「グローカル化」という言葉が、多数の研究対象分野や異なるアプローチから様々な意味合いで使われ、統一性が見られない一方で、ジョージ・リッツァー (George Ritzer) の「グローバル化」(Globalization: Globalization とのスペリングの違いに注意。Ritzer 2003: 194) や、「ローカル化」(Logalization: Lyu & McCarthy 2015), 「ローバル化」(Lobalization: Chew 2010) などの新語の乱立も起きている。これらは概ね、特定の社会問題領域、特に多国籍企業のグ

ローバルなビジネス展開による製品の均質化や現地化, それに対するローカル企業の地元特性に根ざした対応・改良といった文脈に限定されており, グローカル化に係る包括理論への汎用性は高くないと思われる。

そこで筆者としては, まず上記の3つのアプローチを総合して新たな用語の使い分けを提起することにしたい (図2 参照)。

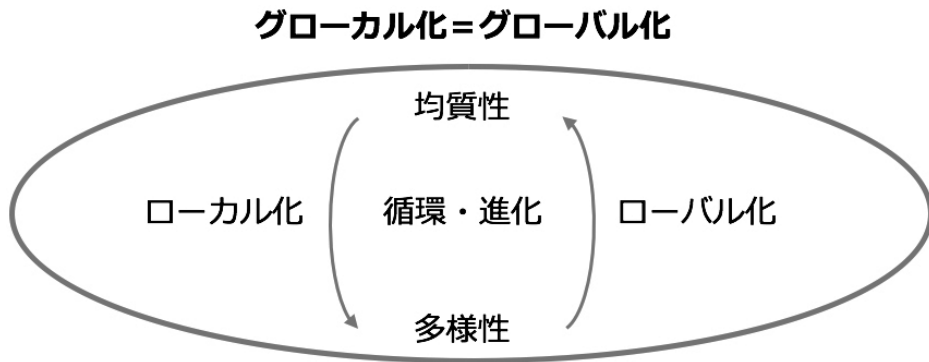


図2

ここでは, ロバートソンと同様にグローバル化とグローカル化の双方について広義の用法を維持し, グローカル化は, グローバル化をグローバルとローカルとの連動の視点から見たものと捉えている。ここで「ローカル化」は, グローバルに均質性が広まった状態に対しローカルなレベルで様々な変異が起こり多様性が生まれるプロセスの総体を指す。それとは逆に, 多様性の中からある特定のローカリティーでの変異が発展し, 新たなグローバルスタンダードとなって均質性をもたらす局面 (一般にはそれを指して「グローバル化」と呼ぶ人も多い) に, ここでは「ローバル化」の名称を当てることとする。この概念図においては, 楕円の下方と上方は, ローカルレベルとグローバルレベルではなく, 多様性と均質性というグローバルな二つの状況を表している。

以上は基本的に概念の新たな整理を提起するものであるに過ぎないが, このアプローチはより本質的に, ローカル化とローバル化が, 一体不可分な体系の中で連動し同時進行するという点と, その態様は永続的な循環性<sup>4)</sup>を持ち, また進化し続けるものであることを示そうとする点で, ロバートソンや上杉, ルードメトフらのアプローチを発展させるものである。

## 2. ハンバーガーの発展史に見るグローカル化における永続的循環の構造

このような永続的循環構造の可能性を示す具体的な事例として, グローバル化の議論ではよく引き合いに出されるハンバーガーが歴史的に形成されてきた経緯を見ることとしたい。

リッツァーは, ファストフードチェーンの代表格であるマクドナルドが, 効率的で, 計測

可能、予測可能な規格化された品質管理を追求したビジネスのモデルが、経済活動を超えてグローバル化全般を特徴付けるものであるとみなし、「マクドナルド化」(McDonaldization)という新しい言葉を創った (Ritzer 1993)。これは 20 世紀後半からの時代、より端的には 1970 年代から 80 年代以降現在まで続いているグローバル化の最新段階に着目したものであり、かつての時代とは質的に異なる現代の社会変動のあり方について正鵠を得た洞察を提起するものであった。しかしグローバル化は、多くの論者が指摘するように、広義にははるか以前の時代から続いてきているより長期の歴史的現象である。グローバル化に関して広く読まれている入門書の一つ *Globalization: A Very Short Introduction* の著者マンフレッド・ステイガー (Manfred Steger) は、その中で「グローバル化は、何世紀にも亘って、幾つかの明確な質的展開の敷居を越えてきた長期的なプロセスである」と総括している (Steger 2009: 19)。そのようにより長期的な歴史のプロセスとしてのグローバル化、またはそれをグローバルとローカルとの連動の視点から見たグローカル化はどのような変動を経てきているのであろうか。ここでは、マクドナルドが誕生した前後の、ハンバーガーという料理自体の発展の歴史をたどり、そのより長期の底流を探ることとしたい。

マクドナルドはもともと 1940 年にカリフォルニア南部のサン・ベルナルディーノでマクドナルド兄弟が始めた 1 号店に遡る。その後オーナーは変わり、フランチャイズとしての拠点をイリノイ州に移したりしつつ、全米で最有力のハンバーガーチェーンに成長していった。しかし、ハンバーガーのファストフードチェーンはマクドナルドが初めてではなかった。ハンバーガーチェーンの先駆けは、1921 年にカンザス州ウィチタで 1 号店を開店したホワイト・キャッスルであった<sup>5)</sup>。ホワイト・キャッスルは中西部・中部大西洋岸ではかなり普及していた。またその成功に肖って各地に多数のハンバーガーチェーンが生まれた。しかし、全米、さらには世界に展開し業界 No. 1 にのし上がったのはマクドナルドであった。この経緯についてはアンドルー・スミス (Andrew F. Smith) の *Hamburger: A Global History* が詳しい (スミス, 小巻訳 2011: 29-47)。

マクドナルドは 1971 年には日本に進出し、日本での 1 号店を銀座 4 丁目の三越デパートの一階で開店した<sup>6)</sup>。マクドナルドはこの頃日本と前後して世界各国に進出しつつあったと想像される。そこでは、ロバートソンの定義を使えば、個別性の普遍化、つまりカリフォルニアの片隅で始まった個別的な商いが、世界的・普遍的なブランドに成長したとすることができる。

その翌年 1972 年には日本で、日本ブランドの初のハンバーガーチェーンであるモスバーガーが創業し、その 1 号店が東京でオープンした。モスバーガーはマクドナルドとは差別化した日本人の好みであったハンバーガーを提供することを掲げて、1973 年にテリヤキバーガーの販売を開始した。ここでは、ロバートソン流の普遍性の個別化が起きたことになる。同様に、日本国内でも沖縄ではゴーヤー・バーガー、韓国ではキムチ・バーガー、インドではベジバーガーが生まれて、普遍性の個別化は多様性をもたらしたことが伺える (上杉 2014: 4)。

これらのバリエーションの中で、テリヤキバーガーにはマクドナルド日本も追随し、やがて他の各国にもサムライバーガーや将軍バーガーなどの別名で広まって行った。つまり今度はテリヤキバーガーという個性を帯びていたものが新たに普遍化してきたということになる。ここで留意すべきことは、これらの全ての局面で、料理という多分に文化的な媒体を通じたグローバル化の過程は、流通などの経済の仕組みに支えられているということである。

次に、ホワイト・キャッスルやマクドナルドの創業時に戻って、そこからさらに時代を遡ってみたい。これらのファストフードチェーンを通じた販売方式が生まれる以前、ハンバーガー自体が全米的に広まったのはいつ頃だったのであろうか。通常言われているのは、1904年にミズーリ州セントルイスで開かれた万国博覧会の会場でハンバーガーが販売されたことである。従って、この頃にはアメリカで全国的に見られる料理になっていたと思われる。その普遍性から、ファストフード方式のブランドで販売するという個性が生まれるのは上記の1921年のホワイトキャッスルの創業時ということになる。

では、もともとハンバーガーの原型、つまりハンバーグステーキをパンに挟んだ料理が最初に生まれたのはいつ、どこでだったのか。これには諸説あって、ここ一箇所というのは決められないようである。食べ物史にはありがちな、我が地元こそが発祥の地という主張や都市伝説が乱立しており、信頼すべき文献は、諸説を挙げながらそのどれも実証はできず真相は不明としている (Hogan 1997: 22-23, スミス, 小巻訳 2011: 11)。本論の趣旨からはそのどれが真実であったかは重要ではない。概ね1880年代から20世紀の初頭にかけて起きたことであろうとの推定の下に、ここでは便宜的に都市伝説の一つである、ドイツのハンブルグで1891年にオットー・クアズ (Otto Kuase) という人が作ったという説を挙げておきたい<sup>7)</sup>。これが正しいとすると、ハンバーガーは多分ハンブルグの港から出航したドイツの水兵か移民がアメリカにもたらしたのであろうと推測される。

そのさらに前に遡れば、ヨーロッパでハンバーグステーキが一般的に食べ始められた時期が19世紀中にあった。その前身は、やはりヨーロッパで挽肉を加熱せず生でタルタルステーキと称して食べ始めた時代があり、さらにその起源は、不確かではあるが12世紀ごろのモンゴル帝国の遊牧民タタール人の馬肉料理に辿ることができる<sup>8)</sup>とされている (Jacob & Jacob 2010: 165)。

以上のハンバーガーにまつわる食べ物の発展史をチャートにすれば、個性の普遍化と普遍性の個別化とが順繰りに派生していく循環の構図が浮き上がって来る (図3参照)。しかもこれは終わりが無い、永続的に繰り返すプロセスであり、それをもたらす内在的なメカニズムが存在するのではないかとの推論が成り立つ。

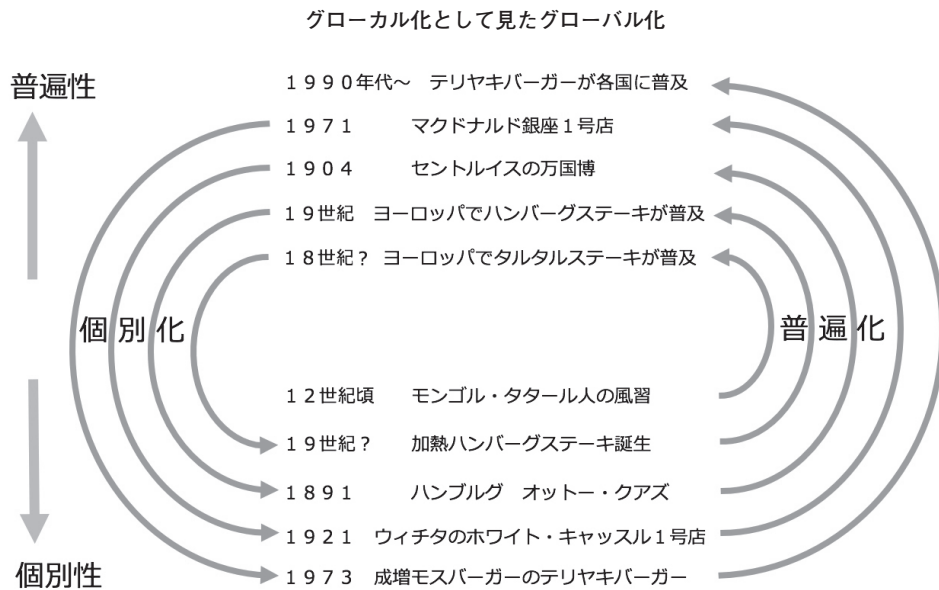


図3 ハンバーガーの発展史に見る普遍化と個別化のサイクル

そして、このような普遍化と個別化とのサイクルの構造があるとした場合には、それは食べ物に限られたことではなく、その他の文化的事象、商品やサービスなど経済取引の対象、その他より広く、ライフスタイルや風習、社会慣行、規範、さらには経済や政治の制度まで含めて、人間に関わる社会事象全般に多少とも働き得るプロセスではないかと考えられる。

多数の説明変数が介在する社会、その中でも特に複雑な国際社会について、このようなグラウンド・ナラティブを立てることは通常は慎重になるべきである。このセオリーは当てはまらない事象も必然的に数多く指摘されるであろう。しかし、近似的には当てはまるケースが相当数検証される場合には、この仮説の意義は認められるであろう。

ハンバーガーについての考察では留意しなければならない点がもう一つある。それは、上記の多様化の過程で出てきたハンバーガーの各地のバリエーションは、どれも人気を博して成功したとは限らないということである。おそらくは非常にたくさん試作されたであろうこれらバリエーションの多くは、結局余り売れずに消えて行ったことが想像される。テリヤキバーガー、あるいはマクドナルド自身が1967年に売り出したビッグマックのように、新たなスタンダード商品として普遍化を達成したものの他に、局地的に中程度の成功を納めたバリエーションも相当数あったであろう。これらは世界のハンバーガー市場に多様性をもたらし、ビッグマックに代表される均質性と共存する構図を築いたと言える。

このような多様性と均質性との共存の構造が生まれるメカニズム、そこに働く原理は何かということをも以下に考えてみたい。

### 3. 利己的遺伝子・ミーム論から見るグローバル化

この問題には実は、生物全般の形質と行動を説明する進化生物学、その中でも英国の生物学者リチャード・ドーキンス (Richard Dawkins) が体系化した、遺伝子を自然淘汰の基本

単位とする進化論が重要なヒントを与えてくれる。本論の目的からは、その全容を紹介する代わりに、同人の有名な著書 *The Selfish Gene* の終章<sup>8)</sup> から次の数行を直接引用することから始めたい。ここでは、遺伝子が自己複製するプロセスが複製のエラー（突然変異）を経てたどる一般的な経過が語られている。

「存在するに至った複製子は、自らのコピーを際限なく大きいセットで生み出す能力を持つ。しかし、コピーの過程は常に完全ということはありません、全体の複製子の中には互いに違う変種が含まれるようになる。これらの変種のうちのいくつかは自己複製の力を失う結果、その同族も存続しなくなる。他の変種の中には、複製力は持つが、その効率は高くないものがある。さらに他の変種からは、新しい芸を持つものも出現する。それらは、先達の複製子や、同世代の他の変種よりも優れた自己複製子となる。そして、それらの子孫が全体の中で支配的になって行く。時が経つにつれ、世界は最も強力で才覚に富んだ複製子で満たされるようになる。」(Dawkins 2016: 342. 訳及び下線は筆者)

ここで、「複製子」を「ハンバーガー」に、「コピーの過程」を「量産販売プロセス」に、「新しい芸」を「消費者に好まれる新しい味」と読み替えれば、上記のファストフードハンバーガーが、一つの種類が遍在する初期の状況から、ローカル化で多様性が現出するフェーズを経て、次の強力な新商品が支配的な広まりを見せるまでのサイクルの描写そのものになる。

この驚くべき類似性は、

- (1) 単なる偶然によるものなのか。
- (2) 遺伝子から、遺伝子が宿る生命個体である人間、その人間が構成する社会、そこにおける諸現象、という何階層もの飛躍を経てもなおそこに何らかの遠隔的な連鎖があることによるのか。

それとも、

- (3) 自己複製子が、複製を行うための何らかの媒体を介して様々な表現形 (Phenotype) を創り出し、変異による淘汰のプロセスを通じて一定の均衡点 (均質性と多様性の何らかのバランス) への収斂や他の均衡点への移行を繰り返すというメカニズムは、宇宙全体に共通する生命体の最適体系であるからなのか。

これらの3つの可能な説明のうち、(2) と (3) は一見いずれも迂遠なものとの印象を与えるであろう。これらが妥当するかどうかは極めて難しい問題である。遺伝子は自らの意思は持たない。遺伝子の複製と、遺伝子が宿る生命の増殖の過程は、一見合目的的に設計されたものであるように見えても、それは結果的な見かけに過ぎないことを遺伝子に基づく進化生物学は教えてくれる。一方社会現象は、目的意識を持った人間の行動が基底にある。従って、両者を同列に論ずることには基本的に無理であろう。しかし筆者は、上記の問いへの答えが (1) だと断定することもできないと考えている。他方で (2) の論理を実証する



ことは俄には困難であろう。しかし(3)は、実はドーキンス自身が宇宙の全ての「生命」についての仮説として述べていることである(Dawkins 2016: 342)。この「生命」を「社会」ないし「文化」に読み替える類推が無理ではないことを予想させるのが、同人自らが提唱した「ミーム」(meme)論である(Dawkins 2016: 245-260)。

ミームは、その最初の定義によれば、人の脳から脳へ伝達され複製(模倣)される文化的情報である。例えば、音楽のメロディーや、服装のファッション、より一般的にはアイデアなどである。ドーキンスは、ミームの進化を遺伝子の進化との類推で捉え、優れたミームに求められる基本的な性質は、遺伝子におけるのと同様に、1) 寿命の長さ、2) 多産性、および3) 複製の正確さであるとしている(Dawkins 2016: 21-22, 251)。ミームは、ある程度の正確さで複製されていく過程で、ある程度の頻度で変異を起こす場合には、遺伝子に準じて進化のプロセスを生むと考えられる。しかしミームと遺伝子とは伝わる媒体が全く異なり、ミームの方がはるかに早い速度で伝播する。また、ミームにおける複製の正確さは一般的に遺伝子には及ばないであろう。

ドーキンス自身は、ミームが人の行動をどう規定し、また文化や社会にどう影響するかについては余り立ち入らず、ミームの概念を提起したのは「遺伝子が全てを決定するものではないことを示すためであり、遺伝子とミームは同じ原理で働くものの、互いに無関係な別物である」と断っている(Dawkins 2016: 424)。しかし、その後ミームの概念を用いて社会的文化的な進化の仕組みを解析しようとする論者による様々な「ミーム学」(memetics)が展開されてきた。またそれと並行して1970-80年代から、ミームの概念は必ずしも援用しないものの、人間を生物学的な進化と文化的な進化の間の相互作用の産物として捉え、遺伝子と文化の共進化のメカニズムを学際的に解明しようとする「二重相続理論」(dual inheritance theory)が勃興してきている。これらの系譜の詳しい紹介はここでは割愛するが、遺伝子の進化と文化・社会の進化は類似したプロセスを経るものであり、また相互に無関係ではなく影響し合うことについて最近では論者の間で一定の共通理解が定着しつつあると言って良い。又、この分野の最前線の研究者の一人アレックス・メスーディ(Alex Mesoudi)は、著書 *Cultural Evolution: How Darwinian Theory can explain Human Culture and Synthesize the Social Sciences* の終章(メスーディ, 野中訳 2016: 321-)において、「進化論が共通の理論的枠組みとなればばらばらだった生物学の諸分野を統合したように、社会科学においても同様の統合は可能」と論じている。そして、進化生物学と文化進化学との構造の対比を試みている(同: 322)。具体的には、生物進化の科学として、分子遺伝学などのミクロなレベルから分類学などの高次なレベルまでの階層構造と、文化進化の科学として、ミクロな神経ミーム学から考古学や歴史などのマクロな領域に亘る階層とを図式で対照させ、これら全体に通ずる社会科学の統一理論がいずれ構築されるであろうと予測している。

メスーディ自身はミーム学には必ずしも与していないものの、一部の研究者は種々の社会問題の分析にミーム学を応用して、ミームでのみうまく説明できる現象を示しており(Situngkir 2004, Harich 2014: 39-)、それらによっても上記のメスーディの予言に沿った前

進は既に見られる。他方、国際関係に関わる問題をミーム学的に記述しようとした研究は、筆者が承知する限りまだない。国際関係、就中本論で取り上げているグローバル化に関する研究は社会科学の階層の中では勝れてマクロな領域であり、そのような論考を行うに適した分野とはまだ一般には見做されていないと思われる。二重相統理論に係る研究は現在までのところ遺伝的進化と社会的文化的進化とが直接に連動する関係<sup>9)</sup>を数理的なモデルを立ててデータで検証しようとするものが多い。この方向での研究はさらに発展が待たれるところである。しかしこれら二つの進化プロセスの間の直接の連動関係に考察を限定する限り、実証可能性は高い反面、その適用範囲は限られるであろう。その主な理由は、二つの進化のプロセスはその時間軸が大きく異なることにある。社会文化の進化・淘汰は、生物としての人の進化・淘汰に比べてはるかに早く進む。従って、社会・文化の進化の動態は、その相対的には短い時間軸の中では生物の進化からは一時的に切り離して考えることが、理論の汎用性の観点からは求められる。又、文化的な変化は生物の進化と本質的に共通した構造を持っているとの考えは、元々ダーウィン自身が示唆していたことであり、最近の文化進化論の代表的な諸論者は明確に述べているところである (Richerson & Boyd 2005: 13, 252-253, メスーディ, 野中訳 2016: 46-)。本論では、上記で見たハンバーガーの発展史と遺伝子に基づく進化のプロセスとの際立った類似性にも鑑み、その流れの延長として、社会的・文化的なミームの概念を立てた論考をグローバル化などの現象について行うことは有用との考えに立って論考を進めたい。その有用性は、特に以下で見るように、社会的文化的な変動のプロセスにおいて均質性と多様性が共存し交互に派生する構造を、ミームの変異を軸として明確に記述することができる点にある。このことは数理的にモデル化することが可能であろう。しかし本論としては数式は用いない記述に徹することとし、「ミーム」は次のように穏やかに定義することとしたい。

社会において、一定の精度と頻度で、模倣ないしコピーされ得る観念、事物、慣習、制度など。

#### 4. グローカル化の再定義

以上の議論を改めて要約すると、まずグローカル化は、長期のタイムスパンで考えれば、昔から続いてきた社会的・文化的事象の永続的な循環のメカニズムであり、グローバル化を、グローバルなレベルとローカルなレベルとの連動の側面から捉え直したものに他ならない。それは無数の構成要素から成り立っているが、特定の要素 (例えば上で見たハンバーガーの発展史) に着目すれば、マクロ的には、均質性と多様性が一定の割合で共存し、あるいは互いの間を揺れ動くといった動態を示す。それは一見、自然選択により生物が進化するプロセスと非常に似ている。生物の進化については、ドーキンスが集大成した利己的遺伝子論による説明の体系が確立している。それは自己複製子としての遺伝子を分析の基本単位とする還元論である。その類推から、同じくドーキンスが提唱したミームという、人の思考か

ら生まれる自己複製子たる種々の文化的情報が人の行動や文化を相当程度規定し、社会現象を説明する一つの有力な概念になるとの仮説が立てられる。遺伝子に基づく生命の進化と、ミームが介在する社会のダイナミクスとの間には、直接の関係はないとしても、遺伝子とミームとの自己複製子としての共通性からの類推として、グローカル化についてミーム論に立ったいくつかの原理的な考察を行うことが出来るであろう。

その前提として、ここではグローカル化（グローバル化を還元論的に捉えた概念）を次のように広く定義することを提案したい。

ミーム複製のグローバルな集積のプロセス。

## 5. グローカル化の基本構造と特徴

本論は、社会現象は全てミームで説明出来るとの前提に立つものでもとよりない。しかし、上記の定義のような基本的要件を満たすミームだけでも、その総体はグローカル化という社会の動態を解明するには十分な規模になり得るとの考えに立って、以下にグローカル化の基本構造と特徴を論ずることとしたい。

### (1) 循環性と進化性

上記のように定義したグローカル化の動態には、すでに述べた循環性に加え、生物界からの類推では進化性も内在すると考えられる。現に、社会においてミームと見做し得る様々な事物、アイデア、慣習、規範、制度などは、歴史を通じて変遷を遂げてきた過程で進化したと言い得るものが多いことには一定の賛同が得られるであろう。他方で、循環性にしても、進化性にしても、妥当するとは言えない例もまた枚挙にいとまがないであろう。そもそも生物の進化の過程も決して一方的なものではなく、利己的な遺伝子による進化の最適解 (evolutionarily stable strategy) が、特定の条件下では種の絶滅になる場合もあることはドーキンス自身が述べている (Dawkins 2016: 242)。ましてや、複製の精度が遺伝子よりはるかに低い様々なミームと、これらに影響する多数の環境要因が複雑に交錯し合う社会においては、特定の構造がそう簡単明瞭に観察し得るとは期待し難い。それでもなお、社会（注：国際社会を含む）は、紆余曲折は経つつも、長期には総じて進化を遂げてきたという世界観は十分に成り立つ。比喩的に述べれば、生物進化の素晴らしく精緻なプロセスを、社会は、はるかに遅れて、はるかに覚束ない足取りで、しかしはるかに早い速度で、追随しようとしているのである。

### (2) 均質化と多様化

ロバートソンの呼称では普遍化 (universalization) と個別化 (particularization)、筆者の用語ではローバル化とローカル化という、マクロレベルで見た現象は、二項対立的に捉えられるべきものではなく、グローカル化という大きな一体的プロセスの二相であることはす

で明らかにした。マイクロレベルでは、多くの論者が着目する企業活動の国際展開と地域社会との相克という特定の文脈においては、局所近似的な二項対立の図式も観察し得る。それはマクロのプロセスと矛盾するものではない。

他方、均質化と多様化が具体的にどういう局面で現れるかについては、次のような考察が可能である。

国民国家の枠組みが引き続き強固に存続する中では、民族的、文化的な区分けや国境を隔てた多様性は多分に温存される一方で、国家や民族集団の中では均質性が保たれる傾向が強いであろう。多くのミームは、まず特定集団や地域の中で広まってそこでの均質性をもたらすであろう。そのレベルで見れば世界全体は多様性を帯びる。しかし、ミームの中で特に強いアピールを持ったものは全ての境界を超えて世界に広まるであろう。具体例としては、現代のポップス音楽の勢力図にこの図式が当てはまると言えよう。1960年代に活躍したザ・ビートルズやボブ・ディランのことが典型的に想起される。

他方で、グローバル化が進んでも、孤立した社会集団 (enclave society) が新たに形成される現象が見られることも、プライアン・S・ターナー (Turner 2007) などが指摘するところである。また、ユーリ・ラム (Ram 2004) が観察したように、構造的・制度的なレベルでは均質性が、表現や象徴のレベルでは多様性がより多く見られることも一つの傾向であろう。

### (3) グローカル化の源泉—変異—

生物進化の根元には遺伝子の突然変異があることは広く知られた事実である。遺伝子の変異は、通常は非常な精度と厳格さを持って遺伝子が自己複製する過程で、稀に複製のエラーが生じることを指す。グローカル化におけるミームの「変異」に当たる事象は、そのミームの性質によっても様々であろうが、何れにしてもその寿命、頻度、精度などにおいて遺伝子の変異とは大きく異なる。しかし、グローカル化という大きな一体的プロセスを生む源泉となるのは、生物進化のプロセスを生む源泉が遺伝子の変異であるのと同様に、ミームの「変異」であると考えてよいであろう。

そして重要なことは、ミームの変異が起きるのは、当然のことながらローカルな場、即ちローカリティー (locality) だということである。そのローカリティーはどこであっても良い。

グローカル化の二つの位相であるローカル化とローバル化は、交互に派生し続けるものである以上、どちらが先でどちらが後ということは、構造論としては論ずる意味がない。しかしローカル化とローバル化とは実体として均等な対称を成すものではない。全体のプロセスを生む鍵となる変異がローカル化の方の本質的要素としてあるからである。

グローバル化の象徴として頻繁に引用されるマクドナルドのファストフードチェーンは、常にグローバルに先にありき存在として取り上げられてきた。すでに述べたとおり、その出自はサン・ベルナルディーノというローカリティーであったことはほとんどの論者が没却し

ている。本論の観点からは、そこにこそ見事な「変異」の見本が見られるのである。

変異は、このサン・ベルナルディーノのマクドナルド1号店に見られるとおり、「改変」（産業的にはイノベーションや現地化など）が一つの類型である。全くの更地に新しいものが生まれるということは原則としてない。前身となる何らかの原型に対して手が加えられたものが基本形態である。改変の度合いは様々であり、原型からの乖離が大きい場合は実質的に新たな原型と見做すべき場合もあろう。ドーキンス自身がミームの例として最初に言及したことからよく引き合いに出される音楽の旋律（Dawkins 2016: 249）など、芸術作品は通常は創造物と言うべきであろう。その意味でミームにおける循環の構図は必ずしも無限なものではなく、起点と終点があると考えべき場合もあることは否定できない。それでも、アーティストのインスピレーションには、意識の深層から湧いてくるものを含めて、常に何らかの原型があるとも考えることも可能である。

変異のもう一つの重要な類型は「融合」である。文化の融合で考えると分かりやすい。一般にローカリティーによる外来の異文化への反応には次の4つの類型が考えられる：1）拒絶、2）共存、3）融合、及び4）置換である。非常に強力な文化は世界規模で他の文化を置換して広まり、その限りで均質性が生じる（例えば、米国ハリウッド映画の世界的広まりは表見的にはこれに近い。そこには資本の力が介在することに留意する必要がある）。拒絶、共存、融合はいずれも文化多様性の維持ないし創出につながる。その中でも、現実によく起こり、またグローカル化の循環のメカニズムをもたらしのは融合であろう。ロードメトフはこれを、グローバルに広がった文化などの「波」がローカリティーにおいて「屈折」とのメタファーを用いて説明している（Roudometof 2016: 64-68）。筆者は、外来文化のミームが地場文化のミームと融合すると捉えるのが適切だと考える。

#### （4）二つのローカリティー

以上の議論は、ローカリティーは暗黙に地理的な空間であることを前提としている。地理的な空間に対しては、目には見えないが、特定の理念や問題意識を共有する多数の人がそれとして認識する、いわば「相対的」な社会空間も広く論じられるようになっている（Roudometof 2016: 34）。近年のソーシャル・メディアなどの発達で、地理的な空間とは別個に構築される社会的な繋がり空間はその一例であろう。これは、国際関係の構造は人々が共有する理念によって構築された帰属意識や利益認識（いずれも間主観概念）で決定されるとするコンストラクティビズム（構成主義）の考え方に通じている。グローカル化の体系には本来はこれらの「相対的」なローカリティーも含めて考える必要がある。そして、それでもローカル化、ローバル化と変異などが同じ原理に従って起きるのかどうかは興味深い問題である。

一点だけ考察を述べれば、そこでは、ミームの中の原初的な形態である理念が、現実空間を介さずに、相対空間を直接に自らの表現形として形成すると捉えることができる。そのような相対空間をローカリティーとするグローカル化は、環境条件次第では、より純粋に、変

異とそれがもたらす均質化と多様化及び循環性と進化性の構図を示すのではないかと推察される。具体例としては、図らずも最近ミームという言葉が、大衆レベルではインターネット上で共有が繰り返されて広まる「ネットミーム」(典型的には、言葉のフレーズを挿入した画像で、メッセージ性があるもの)を指す日常用語として使われるようになったことが想起される。

## 6. グローカル化のメカニズム

以上のような構造と特徴を持つグローカル化のメカニズムの理解をさらに進めるため、以下に、グローカル化のプロセスに働く力と、ミクロ(ローカル)とマクロ(グローバル)の両レベル間の連動の仕組みについて若干の考察を行う。その中で、ミームなどの力と、文化に関わる人間性との相互作用についての試論を提示する。

### (1) グローカル化を動かす「力」

グローカル化は、国際社会の基本的な動態であり、これを解明する理論は政策も念頭に置くことが求められる。そのためには、グローカル化において働く力についての考察を避けて通ることはできない。

ルドメトフは、力に関する補論と題する考察(Roudometof 2016: 72-75)の中で、ローカリティーが持つ力の三分類を提起している。そこではグローバルとローカルとの相互作用を波の伝播に喩えていることの延長で、ローカリティーが(1)自らの波を発信する力、(2)外来の波に抵抗する力、及び(3)外来の波を修正する力、の3つを持つとしている。これはローカリティーに視点が限定されたものであるが、ミーム論の立場からも興味深い洞察が得られる。これら3つの力はいずれもミームの性質から派生するものとも解される。それぞれ、ローカルなミームが(1)グローバルに複製されること、(2)外来のミームを受け付けないこと、及び(3)外来のミームと融合することに対応していると考えられる。

筆者は、グローカル化において働く力は、ミーム自体の力と、ミームを伝播する媒体(media)の力とに分けて考えることを提案したい。媒体は、ドーキンスの進化生物論からの類推で言えば、遺伝子が統御するプロセスで形成される「表現形」(Phenotype: 生存機械 survival machine である生命個体はその集積)、及び「延長された表現形」(Extended phenotype: Dawkins 1999)、さらにはそれらの表現形が活動する空間までを含む広い概念に対応するものと言っても良い。ミーム自体の力は、ミームのアピール力、(他のミームとの)親和力、創造力などと観念できよう。それは、基本的に人間性に根ざすものと言っても良い。国際関係における伝統的な力の三分類(軍事力と経済力からなるハードパワーとソフトパワー)を借りて単純化を厭わずに言えば、ソフトパワーであると言える。それは人がいる場所であればどこからでも生まれて来得るものであり、基本的に「地域性」はない。一方で、媒体には、経済力、政治力、組織力などのハードパワーが介在し、地域性と偏在性がある<sup>10)</sup>。

ミームと媒体との具体的事例はいくらでも挙げることができよう。ここでは、本論としての一貫性を保つため、ハンバーガーの事例に立ち戻ることとしたい。

マクドナルド兄弟は、1940年にサン・ベルナルディーノでバーベキュー食堂を始めてのち、1948年にはこれをハンバーガースタンドに発展させたとされている。そこでは、すでに原型としてあったハンバーガー自体や、1921年にホワイト・キャッスルが始めていたハンバーガーのファストフードという販売形態（それぞれミームである）をさらに独自に改良する着想（ミーム）を得たといえることができる。これが、同兄弟自らと、会社が途中で買収された後は別の所有者の資本と取引ネットワークなど（媒体）とによって、「マクドナルド」の商標（これもミーム）は維持しながら、フランチャイズ方式でチェーン展開されて行った。それを、競争者に打ち勝って世界最大のファストフード網にまで至らしめた力は、明らかに各種のミーム力と媒体力との複合であったろうと考えられる。

もう一つ、より文化的な事例としては、ドーキンスのミームの原型である音楽の旋律を取り上げることが適当であろう。ここでは、作曲家の頭に芽生えた旋律そのもの、あるいはそれを書き留めた楽譜が原型となるミームであると言えよう。言い換えれば、文化的なコンテンツである。これが、実際に歌われるか、演奏されれば、遺伝学的に言えば表現形、文化論の用語では文化的表現となる。ミームとしては一段発展したものである。そこに歌手や演奏家という媒体が介在する。次にその演奏がCDに録音され、音楽会社のネットワークを通じて販売されるという一連のプロセス（媒体）を経て、中でも特に成功するものはグローバルに広まることとなる。ここで、CDは経済的価値を帯びた文化的プロダクトである。同時にCD自体がもう一段発展したミームと見做すことも可能であるが、本論の趣旨から言えば、演奏というミームを不可分の一体となって伝播する媒体でもある。そこでは、ミームと媒体の力は結合している。我々が音楽のCDを買うのは、通常固形物としてのCDを欲するからではなく、その音楽が気に入っているからであるが、そこでは我々が意識するとしないうちに問わず、媒体としてのCD、それを我々に提供する企業の販売、広報、流通網などの媒体としての力が複合的に働いている。

## （2）グローカル化におけるマイクロ・マクロ・ループ

以上見てきたグローカル化の循環メカニズムを更に分析する上で有用なのは、マイクロとマクロとの連動の態様を解明しようとするマイクロ・マクロ・リンクの諸学説である。主に経済学において発達したが、社会学でも若干の試みが見られる。マイクロとマクロの単なるリンクではなく、マイクロ・マクロ・ループの視点から取り上げているものもある（塩沢 2000 など）。各国の論者によく引用されるのはジェームズ・S・コールマン（James S. Coleman）の図式（scheme）である（Coleman 1987）（図4参照）。

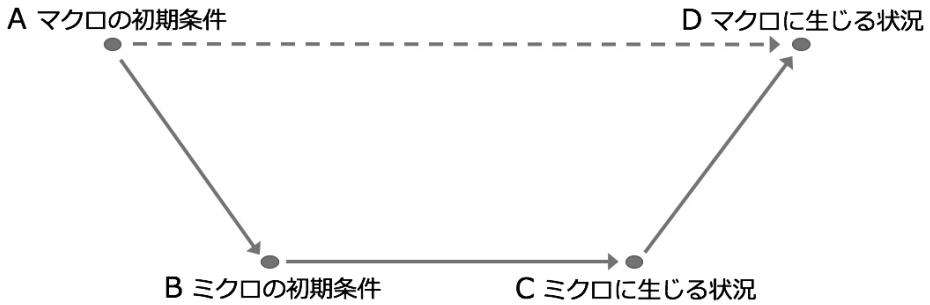


図4 コールマンの図式

コールマンの図式は、コールマンのポートとも呼ばれる、ミクロとマクロとの連動の動態を考える際の視覚的な補助となる逆さまの台形をした簡単な模式図である。いろいろな使われ方をしているが、代表的には、左上のA点がマクロな初期条件、左下のB点がそこから派生するミクロの初期条件、右下のC点はその結果生じるミクロの状況、左上のD点はその集積として生じるマクロの状況である。マクロレベルだけを観察する者にはAからDへの変化と映るが、分析者として見るべき実体はA → B → C → Dの経路を通る一連の変化である。

この図式にグローカル化の事例として本論で取り上げてきたハンバーガーのケースを当てはめてみると、次の図5のようになろう。

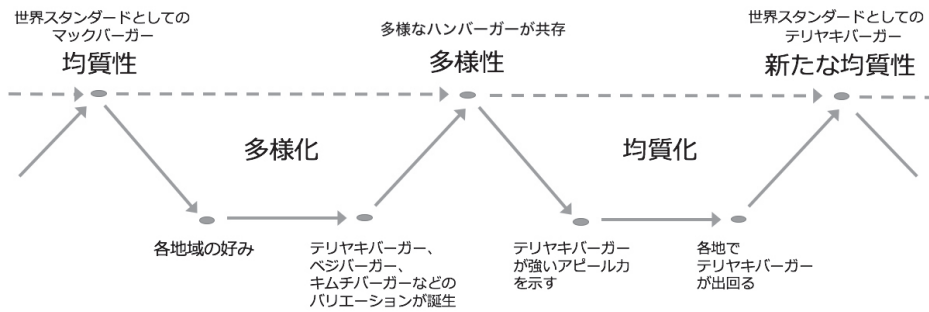


図5 ハンバーガーに見るミクロ・マクロ・ループ

この各転回点で何が起こるかは図中の記述で自明なので、本文では繰り返さない。図の上段がマクロ（グローバル）、下段がミクロ（ローカル）のレベルである。ここに描いた二つの逆さま台形は、それぞれ多様化（＝ローカル化）と均質化（＝ローバル化）のフェーズを示しており、二つがセットで循環の1サイクルを形成している。この1サイクルは、二つのミクロ・マクロ・ループからなる。この両ループの左右にはさらに連続する前後のループがあることもグローカル化の循環性からは当然に想定されている。

この図式の有用性は、ミクロレベル（グローカル化の文脈ではローカリティー）で起きることに焦点を当てた具体的な分析を一歩進めさせることであろう。



ハンバーガーの事例にこれを当てはめた結果促される考察は、ローカル化の前線で、外来の文化に対して人間が示す反応を規定する人間性についてである。

経験則として、人は一般に自分にとって有益、ないし好ましいと思うものを手に入れたいと欲する。それは、同じ文化の枠内であればほぼ自動的に湧く感情 ( $\alpha$ ) であろう。しかし、外来の異なる文化の産物に対してはどうであろうか。一方では、異なる文化に魅力を感じ、進んで受け入れようとする感情 ( $\beta$ ) と、他方では、異質なものへの警戒や嫌悪から避けようとする感情 ( $\gamma$ ) の双方があると思われる。 $\beta$  は、自文化には慣れて飽きる (他人の庭の方が良く見える) 感情によっても助長されよう。また  $\gamma$  は、異文化間の交流や情報の流れが増せば、総合的に軽減していくことも予想される<sup>11)</sup>。総じて、 $\alpha + \beta - \gamma$  がプラスとなれば、文化の交流と融合、従ってグローカル化も促進・加速されるであろう。その度合いは上記 (1) で見た外来の文化的ミームと各種メディアの力との相関で決まるであろう。そして、国際社会がグローカル化の循環を経て進化するとの前提に立てば、 $\alpha + \beta - \gamma$  のプラスの値が高いローカルティエ (地域)こそがドーキンス流の進化論的安定戦略 (evolutionarily stable strategy) を実現する主役になる潜在力を持っていると言える。

## おわりに

本論の前半では、グローバル化をグローバルとローカルの両レベル間の連関の視点に立って捉え直した「グローカル化」の概念を規定した。後半では、そのようなグローカル化に見られる循環的進化と、均質性と多様性とが相互に派生する構造についてのミーム論に基づく試論を提示した。グローカル化のメカニズムについては、特にそこで力がどう働くかについての議論をさらに深めることが今後期待される。そこから、グローカル化に関わる政策への有益な展望が開かれれば、本論は単なる頭の体操以上の意味を持ったことになり、筆者にとって望外である。

本論にインスピレーションを与えてくれたドーキンスの利己的遺伝子論は、生物進化が神の意図的な設計になるものではないことを明言するものであった。地球の原初の環境から、遺伝子という自己複製子の原型が生まれ、爾後数十億年を経て、遺伝子の最高の表現形である人間という生存機械 (survival machine) を創り出した過程は、丹念に見ていけば決して奇跡ではなく、自然派生的にかつほぼ不可避免的に起きたであろうことを教えてくれる。

本論では、この遺伝子が支配する生物進化のプロセスと、やはりドーキンス自身が名付け親である非遺伝子的な自己複製子ミームによって規定される文化進化のプロセスを、グローカル化の構造と特徴及びメカニズムの議論として展開した。そこに若干でも理があるとすれば、グローバル化=グローカル化のプロセスもまた、その全体はほぼ自動的に進行していくもので、人間が意識的に統御することは容易ではなく、ましてや万能の設計者がいるものではないことが伺われる。

締め括りに一点再度強調しておきたいことは、グローカル化のプロセス全体の根源にあるミームの変異は必ずローカルティエで発生するということである。それがいつ、どこで、ど

のような形で現れるかは多分に偶然に支配されている。それらの変異のごく一握りがグローバルなレベルでのインパクトを持つに至るまでには、他の様々なミームや媒体との何重もの融合のプロセスを経なければならない。しかし、小さなローカリティーで起きた小さな変異＝原型ミームは、初期条件としてその後大きく展開し得る一連の循環メカニズム全体の帰趨を決定し得る。この観点からは、グローバル化＝グローカル化は、ローカリティー（地域）こそが現場であると同時に、源泉だと言えるのである。

## 注

- (1) 本論では文化を基本的に社会事象全般に関わる広い概念と捉えているが、文脈に応じて適宜「文化・社会」ないし「文化」の用語を互換的に使用する。
- (2) ここでのミームは本文で後に述べるように観念、事物、慣習、制度などを含む広い概念である。
- (3) ここで言うローカリティー（地域）は、市町村、地方、国、国際的な地域など、国際社会の各階層に亘り、また特定の階層、例えば都市についても、中小都市のみならず大都市も均しく含む広義の概念である。
- (4) ここで言う「循環性」は、均質性と多様性が交互に派生し続けるという意味での循環性であり、進化性も併せて考えれば、具体的な事象においては「段階的」な変化を遂げるものと見做した方が実体に即している場合もある。
- (5) 筆者は1950年代の後半に子供としてニューヨークにいたが、マクドナルドはまだ見かけず、白い城を模った特徴的な店の形のホワイト・キャッスルのチェーン店はよく見かけた。
- (6) 当時筆者は学生として開店後間もなくの同店を訪れた。
- (7) ハンブルグのOtto Kuaseがハンバーガーの発明者だったという説はホワイト・キャッスルを情報源とする言及がインターネット上随所で見られる：  
<http://www.historyoffastfood.com/fast-food-types/hamburger-history/>  
<http://www.deseretnews.com/article/595053106/Birth-of-an-icon-Hamburgers-origins-unclear-but-it-became-popular-100-years-ago.html>  
など（2017年3月1日確認）。
- その他の説は全て米国内の場所と人に帰せられるもので、そのいずれにも肩入れしないようにとの「政治的」配慮から本論では便宜的に上記ハンブルグ発祥地説を取った。
- (8) 同書の初版は1976年。ここで引用した終章第12章は1989年の第2版で追加された。
- (9) 有名な例として、人の成人におけるラクトース耐性（牛乳を消化する酵素の有無）と牧畜文化の発展との間に共進性が見出されるとの研究がある（Richerson, Boyd 2005: 191-192）。
- (10) 本論では、ミームを社会の諸制度までを含むものと緩く定義し、その力は基本的にソフトパワーであるとしたが、政治経済制度はハードパワーの源泉になるとの指摘があろう。しかし、制度自体はあくまでもミーム＝観念の所産であって、それがハードパワーを発揮するのは、政治力、経済力などの媒体の力に裏打ちされた運用によって初めて可能となるものである。
- (11) 9/11以降の世界においては、残念ながらこの $\gamma$ の感情が、政治的、民族・宗教的な対立を通し

て高まってきている状況もある。交流が増せばγが高まる局面もあり得ることには留意する必要があるだろう。

## 参考文献

- 上杉富之, 2014, 「グローバル研究を超えて — グローカル研究の構想と今日的意義について —」『グローバル研究』(成城大学グローバル研究センター) No. 1
- 塩沢由典, 2000, 「ミクロ・マクロ・ループについて」『経済学論叢』(京都大学) 第 164 巻第 5 号: 1-73
- スミス, アンドリュー, 小巻靖子訳, 2011, 『ハンバーガーの歴史—世界中でなぜここまで愛されたのか?』ブルース・インターアクションズ (Smith, Andrew, 2008, *Hamburger: A Global History*, Reaktion Books)。
- Chew, Matthew M., 2010, Delineating the Emergent Global Cultural Dynamic of 'Globalization': The Case of Pass-off Menswear in China. *Continuum; Media and Cultural Studies* 24(4): pp559-571.
- Coleman, James S., 1987, Microfoundations and Macrosocial Behavior. In Alexander, Jeffrey C., Bernhard Giesen, Richard Münch and Neil J. Smelser (eds.), *The Micro-Macro Link*, University of California Press: pp153-173.
- Dawkins, Richard, 1999, *The Extended Phenotype: The Long Reach of the Gene*, Revised Edition. Oxford University Press (First published 1982).
- , 2016, *The Selfish Gene: 40<sup>th</sup> Anniversary Edition*. Oxford University Press (First published 1976). (訳: リチャード・ドーキンス [日高敏隆他訳]『利己的な遺伝子 (増補新装版)』紀伊國屋書店, 2006)。
- Harich, Jack, 2012, *The Dueling Loops of the Political Powerplace: Why Progressives Are Stymied and How They Can Find Their Way Again*. Thwink.org.
- Hogan, David Gerard, 1997, *Selling 'em by the Sack: White Castle and the Creation of American Food*. New York University Press.
- Jacob, Mathew, and Mark Jacob, 2010, *What the Great Ate: A Curious History of Food & Fame*. Three Rivers Press.
- Lyu, Lachang and Linda McCarthy, 2015, 'Globalization': Local-Global Processes and the Shiling Leather Industrial District in Guangzhou, China. *Asian Geographer* 32(1): pp37-57.
- Mesoudi, Alex, 2011, *Cultural Evolution: How Darwinian Theory can explain Human Culture and Synthesize the Social Sciences*. University of Chicago Press. (訳: アレックス・メスーディ [野中香方子訳]『文化進化論—ダーウィン進化論は文化を説明できるか』NTT 出版, 2016)。
- Ram, Uri, 2004, Glocommodification: How the Global Consumes the Local - McDonald's in Israel. *Current Sociology* 52(1): pp11-31.
- Richerson, Peter and Robert Boyd, 2005, *Not by Genes Alone: How Culture Transformed Human*

- Evolution*. University of Chicago Press.
- Ritzer, George, 1993, *The McDonalization of Society: An Investigation into the Changing Character of Contemporary Social Life*. Pine Forge Press. (訳: ジョージ・リッツァー [正岡寛司訳] 『マクドナルド化する社会』早稲田大学出版会, 1999)。
- , 2003, Globalization: Glocalization/Grobalization and Something/Nothing. *Sociological Theory*, Vol. 21, No. 3, pp193-209.
- Robertson, Roland, 1992, *Globalization: Social Theory and Global Culture*. Sage. (抄訳: R. ロバートソン [阿倍美哉訳] 『グローバリゼーション—地球文化の社会理論—』東京大学出版会, 1997)。
- Roudometof, Victor, 2016, *Glocalization: A Critical Introduction*. Routledge.
- Situngkir, Hokky, 2004, On Selfish Memes: Culture as complex adaptive system. *Journal of Social Complexity* Vol. 2 No. 1: pp20-32.
- Steger, Manfred B., 2009, *Globalization: A Very Short Introduction*. Oxford University Press. (訳: マンフレッド・B・ステイガー [櫻井公人他訳] 『新版 グローバリゼーション (〈1冊でわかる〉シリーズ)』岩波書店, 2010)。
- Turner, Bryan S., 2003, The Enclave Society: Towards a Sociology of Immobility. *European Journal of Social Theory* 10(2): pp287-304.

## **Glocalization as Globalization Towards a Meme based theory of cyclical evolution**

**Ryuhei Hosoya  
University of Fukui**

Building on existing theories, this paper proposes an alternative conceptual framework for glocalization. Not unlike globalization, its “big brother” concept, glocalization has seen, since its first appearance in academic literature twenty-some years ago, a proliferation of usage across multiple disciplines, contexts and meaning. Theoretical work on glocalization have been sparse and tended to focus on specific issue areas, while some scholars have provided a structured and holistic understanding of the concept; among others, Roland Robertson, Victor Roudometof, and Tomiyuki Uesugi. They all guide this paper in its attempt to construct a synthesized framework which presents glocalization as globalization perceived in a reductionist light.

It assumes that a perpetual cyclicity and evolutionarity are intrinsic to the global-local structure. To explore this mechanism, the paper draws inspiration from Richard Dawkins’ Selfish Gene theory and the notion of the Meme. Use is also made of Coleman’s Scheme of micro-macro links as an additional tool to help explain the dynamics of global-local interaction.

On the issue of the relationship between homogenizing and heterogenizing trends, the analogy from genetic theory helps portray a unitary structure in which the two trends co-constitute. In terms of the powers which drive glocalization, a two-fold structure comprising memetic power and mediatory power is proposed. The theory is also examined against the notion of locality as socially constructed space, along with the conventional geographically defined real space.

Actual cases are cited as appropriate to illustrate the hypotheses. Among others, particular reference is made to the historical evolution of the hamburger.

**Keywords:** Globalization, Glocalization, Selfish gene, Meme, Sociocultural evolution

